

抗がん剤調製 安全対策課題

医療現場での抗がん剤の取り扱い増加を受け、愛媛大医学部附属病院（東温市志津川）と四国がんセンター（松山市南梅本町）は、このほど、県内外のがん診療連携拠点病院など34施設に抗がん剤調製時の除染方法に関するアンケートを初めて実施した。がん患者の増加に伴い、日常的に抗がん剤を扱う薬剤師らの健康リスクへの対策も重要となっており、県病院薬剤師会は会員病院へマニュアルの充実などを促す考え。

厚生労働省によると、性物質などを含む場合も2016年にがんと診断あり、厚労省は14年、薬された人は99万5千人で、薬剤師や看護師が気化した過去最多を更新。伴って、抗がん剤の吸入や針刺治療に用いる抗がん剤のし、接触などで健康障害種類や処分量は増加傾向にある。抗がん剤は患者に適切に投与すれば治療効果が期待できる一方、発がん

愛媛大病院などが34施設調査

内部の空気が漏れ出ない安全キャビネット。抗がん剤の増加に伴い対策の徹底が重要となっている

8月下旬、愛媛大医学部附属病院



要がある」と説明。海外は除染にエタノールを用いる病院が多かったが、の調査では、医療従事者もし抗がん剤をそのまま生肌異常との関連を示唆する結果もあるが「国内は安全対策のスタートが遅く、取り組みが十分とはいえない現状」と指摘する。

アンケートは松山大薬学部との連携事業の一環で、県内の拠点病院や中四国の国立病院機構を対象に実施。薬剤師の調製中に抗がん剤が飛び散った際の除染方法を調べた結果、使用する薬剤や除染を行う範囲、タイミングなどに

は各病院でばらつきがみられた。閉鎖式接続器具の導入は進むものの、一部の抗がん剤のみでの使用や不使用の病院もあった。調査した愛媛大病院の飛鷹範明薬剤師は「県内の活用や、ガウンなど保守会長の「日々多くの患者さんと接し、調製や投与をする医療従事者は、微量でも頻度が増すと、調査した影響を考えると、飛鷹範明薬剤師は「県内の

除染や器具にばらつき

(伊藤松美)